

戦後日本における「カウンセリング」職の成立過程 - 関連職種の相互作用に関する社会学的視点からの 分析 -

著者	丸山 和昭
号	12
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第111 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59102

まる やま かず あき
丸 山 和 昭

学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	教博 第 111 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 総合教育科学専攻
学位論文題目	戦後日本における「カウンセリング」職の成立過程 －関連職種の相互作用に関する社会学的視点からの分析－
論文審査委員	（主査） 教授 秋 永 雄 一 教授 大 桃 敏 行 准教授 安 保 英 勇 准教授 橋 本 鉦 市 （東京大学）

〈論 文 内 容 の 要 旨〉

本論文は、戦後の日本におけるカウンセリングの職業化のプロセスを、専門職論の観点から分析したものである。従来、日本における職業としてのカウンセリングの成立は、臨床心理学の専門職化と同義に捉えられてきた。しかし、臨床心理学の実践家としての臨床心理士の定着状況は、教育・産業・医療の職域によってそれぞれ異なっている。本論文は、このような臨床心理士の定着状況の違いを、臨床心理学に依拠して成立している臨床心理士という専門家集団の特徴と、各職域における関連職種の競合関係から把握される「場(champ)」の構造を解明することによって、専門職の成立過程に関する従来の専門職論に新たな知見を加えることを目指すものである。

第 1 章では、専門職の社会学の先行研究を検討し、それを通じて本論文における理論的枠組みを構築した。アメリカにおける「心理療法／カウンセリング」の成立過程を分析した Andrew Abbott は、近年指摘される専門職概念の揺らぎに対し、知的職業人としての専門職の共通項に注目することによって、独自の発展モデルを構築した。なかでも重要な視点は、競合する複数の専門職間の相互作用を分析対象とした上で、「管轄権(jurisdiction)」の概念を用いて、業務と専門職組織の

連結過程に注目している点にある。本論文では、こうした Abbott の視点を基にして、専門職化を「管轄権」の構築過程として捉え、業務内容・専門職組織・連結構造のそれぞれについて、システム全体と各職域の管轄権の構造を分析する比較軸を設定した。

第2章では、相互作用のシステムとしてのカウンセリング活動の「場」の発展過程をたどり、その過程に則して基本的な時代区分をおこなった。まず、アメリカにおける専門職としてのカウンセラーの発展を跡付け、つぎに、日本へのカウンセラーの導入・展開の過程を、国会会議録等のテキスト分析を通じて明らかにした。分析の結果、機能面での「ガイダンスセラピー」の軸と、実践形態における「部分業務－専門業務」の軸の2つの軸によって構成される平面上に、カウンセリングの意味づけの経時的変化の様相が描き出された。これに基づき、戦後の日本におけるカウンセリングの移入・展開の過程は4つの時期に区分されることが明らかにされた。

続く3つの章では、各職域における管轄権の確立過程について分析した。まず第3章では、教育領域におけるカウンセリングの担い手が生徒指導主事から臨床心理士へと変遷していく過程に注目し、学校教育においては、生徒指導業務の組織的統括者としての生徒指導主事と、心理療法等の専門知識を身につけた外部の専門家としての臨床心理士の間で分業化が進展していったことを明らかにした。

第4章では、産業領域に特化した管轄権を有する産業カウンセラーの集団が少年労働者の悩み相談から職場のメンタルヘルスへと業務を拡大していく過程に注目した。分析の結果、産業カウンセラーが現職者を中心とする企業内専門職としての特徴を有していること、そして、1990年代後半以降、臨床心理士との間で職域の競合が生じ、産業領域に特化したカウンセラーとしての差別化に向けた取り組みが始まったことが明らかにされた。

第5章では、医療領域における心理職の国家資格化をめぐる、「医療心理師」と「臨床心理士」の2つの国家資格構想が出現するまでの過程に注目した。分析の結果、医師の管轄権の下に補助的な専門業務化を進めてきた医療心理職の延長線上にある「医療心理師」構想と、医学からの差別化を志向する臨床心理学の学術団体に主導された「臨床心理士」構想が、職域の競合によって両資格の分立を生み出したことが明らかにされた。

終章では、これまでの各章で分析してきた日本におけるカウンセリングの職業化プロセスを総括し、日本のカウンセリング・システムが、セラピー機能の専門業務化というシステム全体の趨勢と、学術団体に主導された臨床心理士の組織化を背景に、1990年代以降、「カウンセリング」して一括される活動に従事している複数の主体間での相互作用が職域横断的に始まったと結論づけた。そして、さまざまな主体間での相互作用の中から生じた発展と分立を導いた要因として、「学術基盤型」「領域基盤型」「融合型」の3つの専門職化モデルを抽出した。このうち臨床心理士をモデルとする学術基盤型の専門職は、雇用組織や他の専門家に対する独自の知識基盤の確立を中

心に置く専門職化のモデルとして特徴づけられる。一方、生徒指導主事に特徴的な領域基盤型の専門職化モデルは、国家を中心とした組織管理者としての知的職業の形成過程を特徴としていた。産業カウンセラーおよび医療心理師が属する融合型の専門職化モデルは、指導権限を伴った組織雇用上の職階と、その任用の際に求められる独自の知識体系の確立といった、領域基盤および学術基盤の双方の目標の両立を理念型とするものであった。

総じて、このうち教育領域では、生徒指導主事が領域基盤型の専門職として制度化を遂げていたことから、学術基盤型の臨床心理士の参入が容易であった。一方、融合型の産業カウンセラーおよび医療心理師は、学術基盤型の臨床心理士と専門職化に当たっての目標を共有していた。その結果、産業および医療領域では、各領域における正当なカウンセリング専門職としての位置づけをめぐる、職業間の競合が発生することとなった。したがって、日本におけるカウンセリングの職業化過程を特徴づけるのは、学術基盤と領域基盤の明確な差異に基づく分業関係の成立と、産業および医療領域における学術基盤と融合型の類似性に基づく競合関係であったと結論づけられる。

〈論文審査の結果の要旨〉

カウンセリングの業務は、さまざまな職域でさまざまな人によって担われてきた。教育の領域においては、教師が生徒指導主事としてその役割を担い、医療の領域では、医師の指示の下で補助的な専門業務に携わる医療心理職従事者が、そして、産業の領域では産業カウンセラーが、それぞれカウンセリングの業務を担ってきた。このような、カウンセリング業務の職域が領域ごとの「棲み分け」によって成立していた中に、「臨床心理士」という資格を有する専門職業人が登場し、その職域に抵触する可能性が生じてきた。そのことが、教育・医療・産業それぞれの領域でカウンセリング業務の担い手の職域にどのようなインパクトと反応を呼び起こし、どのような方向へと事態を動かしていったのか、また、そのような事態の推移が領域ごとに異なっているのは、いかなる理由によるのか。著者が提示している本論文の研究課題を、著者とは異なる視点からまとめれば、以上のようなことになる。

本論文の課題設定には、学術的な面から見て次の点で重要な意義がある。つまり、資格の保有者が特定の業務に携わるようになったからといって、それがそのまま職業（あるいは専門職）の成立・定着を意味するものではない、ということを含意している点である。著者は、本論文の研究課題を「カウンセリングの職業化のプロセスを、専門職論の観点から分析」することと述べているが、従来の専門職論が見過してきた「問題」（「職業」としての自立性の問題）を浮かび上が

らせている点にこそ本論文の重要な意義がある。

本論文の分析手法に関しては、第2章の「日本におけるカウンセリングの普及過程」で計量テキスト分析の手法を研究課題に則して的確に用いている点は注目に値する。一見したところ、国会議事録を対象にして「カウンセリング」という語の文脈的意味の変遷を辿ることは、本論文の研究課題とは無関係のように感じられる。しかし、「カウンセリング」という業務・活動が誰によって担われ、それがいかなる条件を充たしたときに「職業」として成立し得る条件が整うのか、という問題への答えを解明するための実証的な裏付けを提供している点は特記しておくべきである。このような視点からの分析は、従来の専門職研究にはみられなかったものである。

本論文が明らかにした知見として重要なのは、日本のカウンセリング・システムが、セラピー機能の専門業務化というシステム全体の趨勢と、学術団体に主導された臨床心理士の組織化を背景に、1990年代以降、大きく構造変化を遂げてきたことを明らかにした点にある。このファインディングスは、職域の「管轄権」という観点から、専門職 (profession) のみならず、職業 (occupation) 一般の成立条件を解明する上で大きな示唆を与えるものであり、ここに本論文の学術的な価値があるといえよう。

もちろん、本論文には、審査委員から重要な問題点の指摘もあった。その主だったものを記せば、用いられている概念（たとえば、もっとも基本的な「専門職」あるいは「専門職化」）の定義がやや曖昧であり、ときに厳密さを欠くこと、「専門職化」のモデルとして提示された3つの類型（「学術基盤型」「融合型」「領域基盤型」）は適切か、といったものである。全体にやや荒削りな感は否めないが、極めてチャレンジングな本論文が解明した上述の知見は、今後、別のかたちで公刊されるときには、より説得的かつ緻密なロジックで記述されることを期待したい。

これまで著者は一貫した問題関心に立脚して優れた研究成果を産みだし、その成果を体系化したかたちで纏めたものが本学位請求論文である。卒業論文から本学位請求論文に至るまで、短期間にこれだけの研究の成果を上げたことは高く評価されて然るべきであろう。

よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するのに適当と認める。